G・サルガード著　松村赴訳

『エリザベス朝の裏社会』刀水書房（一九八五・一月）

――社会史のなかの〝Poor と底辺層〟――

小倉襄二

Ⅰ　英国救貧法史のなかで、教区での処遇にあたってその対象者がどのような人々であったのか。私たちはその類型として、有能貧民（able-bodied poor）無能力貧民（disablement）、あるいは、被扶養児童（dependent children）などの分類のあったことを知っている。しかし、その時代の背景、生活のなかで、これらの貧民がいかなる具体的な生活者としての像を描いていたものかについてはほとんど理解していない。わが国の救貧法史の数多い研究書や紹介などにおいても、救貧法の制度としての処遇形態や処遇の機能についての記述はあるが、貧民そのものの生活像についての論述はきわめて稀れである。

たとえば『テューダー・ヒューマニズム研究序説』（植村雅彦・一九六七年三月、創文社刊）では、テューダー・ヒューマニストの「救貧論」として、トーマス・モア、ファン・ルイス・ヴィヴェス、トーマス・スターキーなどの諸説の紹介のなかで描かれた貧民像を詳細に紹介している。たとえば、ヴィヴェスは貧民―三種類の区分、(a)救恤院あるいは慈善院で保護を受ける人びと、(b)自宅で貧困に耐える人びと、(c)定まった住家をもたず、流浪して施与者を求め、しかも労働可能の肉体をもった人びと、として、彼らは、彼ら自身より富裕な人びとを嫉妬する。彼らは、富者がありあまる程のものを所有しているので、道化者、犬、情婦、らばなどを養うことができるが、これに反して自分たちといえば、腹のすいた、小さな子供たちをそだてていくだけの食物すら、手もとに持ちあわせていないといって激怒し、またはげしく不平を鳴らすと述べている。一五二六年に出版されたヴィーヴェスの『貧

『エリザベス朝の裏社会』

民の救済について』の一節である。こうした貧民の類型についてさらにそれらの人々の多彩で複雑な生活像については、〝救貧論〟とは異なった歴史研究による外ない。

G・サルガードによる本書は、貧民の類型論をこえて生々しいくらしのなかで、あるいは生活者の体臭への実感ともいえる次元において貧民～底辺層の姿態を紹介したものである。舞台はエリザベス朝である。眼をみはる対照（コントラスト）の時期、社会階層の最上端では、貴族が優雅と贅沢と威厳、社会の階段の底辺には、家庭のごみの山からパンのかけらを拾いだしてありがたがるような男女、子供がいて、彼らの多くは物乞いをしても無駄となると盗みや詐欺に走ることになった。一五九五年、サセックス州のカウドレー城館におけるモンタギュー子爵アントニーの毎日の正餐の豪華とのコントラストとして描いている。これにつづいて、サルガードは、裏社会（UNDER WORLD）という舞台で、人々が極貧とは紙一重という生活のなかでいかに驚くべき弾力性、機知に富む巧妙さ、無軌道ぶりを伴いつつ多彩な活力にみちて生きていったか、それらの人々は、泥棒、娼婦、障害者、詐欺師らであったが、エリザベス朝のきびしい社会条件に対応して、みずからを生きのびることに執念を燃やしつづけていた。サルガードは〝自らの社会と階層組織を発展させ、独自の手のこんだ巧妙な戦略をあみだして、自分たちが締めだされていた社会をいたるところで食いものにしたか〟を伝えようと努めたと本書の狙いを述べている。

エリザベス朝を彩る人生底辺劇にサルガードがいかなる人々を登場させているのか。

訳者の松村赳氏によれば、この分野は「社会史」（Social History）、あるいは history of society ―生活史の研究に属するもので著者のサルガード氏はエクセター大学の英文学教授である。エリザベス朝人生底辺のドラマは、社会―生活史として、この時代の「浮浪者文学」とか「いかさまものパンフレット」といったたぐいの資料も駆使しての記述となっている。歴史家ではなくて、文学畑の研究者による論証という点にも類書にはない独自性があると指摘している。

こうしたテーマは扱いによっては猟奇趣味に陥ちこんでしまうおそれもあるが、本書は文学研究者の柔軟な視座ということもあって実証性としかも貧民たちの多岐にわたる生活像をあざやかに、手堅く再現している点に資料としても貴重な記録となっている、この裏社会の内実は本書では十章によって構成されている。(1)ロンドン―すべての都市のなかの花、(2)悪業の街外れ、(3)大市の楽しみ、(4)白魔術と黒魔女、(5)占星術師と練金術師、(6)街道のならず者、(7)オートリカスとその一族、(8)お月さまのお気に入り、(9)カウンター監獄とクリンク監獄、(10)ブライドウェルとベドラムとなっている。

Ⅱ　十六世紀当時のロンドン市街図が挿入されていて本書の各項目の道標となっている。(1)のロンドンは本書の総体を予感させる。〝エリザベス朝のロンドンは、現在のわれわれが知っている都市よりずっと活気があり、ずっと騒々しく、ずっと悪臭がひど

く、おそらくはずっと危険で、明らかにずっと生彩に富んでいた〃という。当時のロンドンは対照の鮮かな地であって、ヨーロッパ最大、最稠密の都市と、その内部や周辺の静かな田園の小安息地との間の対照があった……、金持ちと貧乏人とを問わず、当時の階層社会の内部で多少なりとも安心感を抱いていた人びと—除隊兵、主人をもたぬ者、乞食、泥棒、娼婦、浮浪者、障害者、詐欺師との間に対照があった。セント・ポール大聖堂の周辺の描写は、当時のロンドンの活気と混沌を集中表現している。騎士、ぼんくら、伊達男、成上り者、紳士、道化、弁護士、高利貸、破産者、ごろつき、ピューリタン、人殺し、郡衆が足と足、肘と肘をすりあわせるように歩いている情景、訴訟のために地方からロンドンを訪れた農場主たちが、こうした裏社会の連中の餌食となった。ペテン、掏摸の横行、ジェントルマン詐欺師の華麗な手口と犯罪行為などの描写もある。そして、当時のロンドンでは、この裏社会が高度に組織化され、法と秩序を守る力よりはるかに能率的に組織されていたという。底辺に巣喰う連中の分業体制、縄張りの画定、盗品、故買品の迅速な処分、新入りの組織的訓練などについて裏社会の〃同業組合的機能〃として動いていた。これらの詳細な事例もふくめて当時のロンドンはエリザベス朝の全体の縮図であり、また独自の立場をもしめていたという。(2)→(10)に至る項目は、いわば、このロンドンの状況を前提とする裏社会の〃各論〃ともいうべき部分である。

〃悪業の街外れ〃についても、当時のロンドンの街外れ、テムズ川を渡った処のサザツク地区がみごとに組織され、非常に儲かる—歓楽と悪徳の巣窟であり、芝居、熊いじめ、娼婦との戯れに場を提供していた。そして、このサザツク自治市がロンドンの一部となったのは一五五〇年で、この特権のため市当局はエドワード六世に一千マークを支払い、とうとう遊女屋は正真正銘ロンドンに属することになった。ステュー→熱気室→温泉宿→性病治療→売春宿、バンクサイド（テームズ川南岸）は、ヘンリー八世のころまでに遊女河岸になっており、エリザベス朝の英国ではステューが売春—女郎屋を指す一般的な表現となっていた。ヘンリー二世が一一六一年に「サザツクの妓楼行政に関する法令」を発布したときに、その地域の大部分が一世紀以上もウインチエスター司教の管理下におかれていた。売春宿が司教様の地所、肉欲と好色に対する教会のあいまいで偽善的態度、ロンドン市長老の態度も教会と大差なく、一方でサザツクはロンドンの〃汚穢溜め〃（聖アクイナスの売春へのコトバ）で、ウインチエスター司教からこの地の管理を請負っている富める市民にたっぷりと役得を与えてもくれた。エリザベス女王の長い治政中も、置屋の女将に対する庇護と処罰の両策は、ともに弱まることなく続けられた。たとえば、この暗い快楽の斡旋人や娼婦自身が有罪を宣告された場合、彼らはさまざまの刑罰を受け、結局はブライドウェル矯正院（後述）行き、罪を犯した娼婦自身は、まず、はじめに頭を剃りあげられ、荷車で街を引き回される公算が大きく、その際には自らの不品行を記した紙を額につけられ、冷かしに打ち鳴らす床

『エリザベス朝の裏社会』

屋のたらいの音がついて回ったという描写がある。しかし処罰も禁止令も、これら「ウインチエスターの鵞鳥」―女たちについてのウインチエスター司教の干与のお返しについた呼称―の働きに見るべき効果をあげなかった。サルガードは、泥棒、娼婦、人殺し、置屋の女将などはロンドンの裏社会＝地獄の王国を連想させ、エリザベス朝のパンフレット作者、劇作家の表現を借りて、裏社会こそ〝地獄の写し絵〟で、逆にこの世の地獄は裏社会という定着した社会通念を前提としていたという。とくに、フランス病といわれた（黴毒）・性病の惨苦、恐怖、そしてその猖獗ぶりはこの裏社会の底辺ドラマをさらに痛烈なものとした。シェイクスピアの作品の一節も、本書に引用されている。〝たゞ帯のところまでは神々のものだが、その下はみな悪魔のものだ。そこには地獄がある、暗闇がある、硫黄が燃えているどん底がある、燃える、火傷をする悪臭、糜爛、いやはや……〟、そして、この時期の専業売春婦は、主として貧民層の女性、とくに土地を奪われた貧農の妻や娘が供給源であった。サルガードは、道学者の非難の声も社会の改革も、官憲の定期的な手入れも、病毒という天罰も、バンク・サイドその他のエリザベス時代の売春業には骨身にこたえる衝撃とはならなかった。当時の売春宿はロンドンの玄関口で繁昌したが、社会的必要という正当化と、高い地位にある多くの人々の大儲けの見込が巧妙にむすびついていたことを指摘する。ペテン、美人局、娼婦の手練手管、その手口の大部分のあっぱれな野放図さは実はエリザベス朝という言葉の意味するものの一部なのである。

Ⅲ　裏社会はすべてに脈絡がある。救貧法史とこれらの裏社会との対応関係はきわめて複雑である。処遇対象としてのPoorと直接にかかわる部分と一定の脈絡のなかに共通の生活者としての関連と、カウンター監獄やクリンク監獄、さらには、直接的なブライドウエルやベドラムといった施設が干与する部分とは一応の識別が必要であろう。しかし、この〝悪業の街外れ〟にしても、ある部分は、救貧法～当時の救貧論関連のターゲットであったし、一六世紀から十七世紀にかけての、残虐立法、それにつづく「エリザベス救貧法」（一六〇一年）への形成の社会史のなかのPoor像として理解すべきものであろう。G・サルガードの描いてみせたエリザベス朝の貧民像の復元、このレベルについても実情の紹介されたものは稀れであって、英国救貧法史の〝社会史―生活史の背景〟として、きわめて興味ぶかいものといえよう。

(3)の〝大市〟とはセント・バーソロミュー大市のことであって大きな民衆交流、取引市場としてのエリザベス朝を彩る大きいイヴェントであった。このなかにもエリザベス朝の底辺層をまきこんだ熱気が描かれている。(4)→(8)の項には、とくに底辺層のきわだった特性を担った人々が個性的に描かれて、貧民の類型化をはるかに超えた複雑で奥行きの深い民衆の相貌が描出されて、救貧法史の社会史的背景としてきわめて興味ぶかいものとなっている。

この大市はエリザベス期における民衆交歓の大イヴェントであり一二世紀初め、修道士レヒアがセント・バーソロミュー慈善病

院を創設、やがて病院隣接の小修道院が巡礼地として評判となり、人々が商業—たとえば、毛織物と羊毛の販売、そして屋台店が立ちならび、全イングランドから人々は交易と娯楽をもとめてどっと参集した。大市（フェア）は、サルガードによれば、エリザベス朝の社会、経済生活の中心であって、職業安定所・市場・娯楽場・運動競技場・劇場・音楽会場・食堂・賭博場のあわさったもので、熱気と雑踏の一大交歓場であった。とくに、エリザベス時代には、いつも教区の捜索隊や牢獄におびえながら放浪の旅を続けることに疲れた人々が、この大市に蝟集してわずかばかりの衣食住の代償に労力奉仕を申し出た。これは、底辺層にとって、誰かに所属していなければ、その生活は哀れで、きたならしく、動物なみで、短命に終るかもしれなかったからである。この所属（belong）は、救貧法上も重要な概念であるが、主人持ちの立証には、こうした大市で、旅券や、証明書、偽造文書をかなりの高値で入手することになった。この〝大市め不道徳でけがらわしい大市め〟と戯曲のなかでも登場する一つの混沌とした交歓の場でもあった。

白魔術と黒魔女については、宗教改革の到来とともにカトリックは英国では英国国教会にとって代わられる。サルガードによればその相違は、英国国教会は、ほぼ完全にキリスト教から魔術を取り除いた点にあると指摘する。カトリックの聖職者による懺悔と赦罪、呪文かけ、聖変化、悪魔払いと治療……の魔術を除去しようとしたプロテスタント教会が唱道したものは、絶えざる祈りと不屈の努力のみで、この宗教行為と魔術とはまったく無関係と

された。しかし、この新たな公式見解は、汗水たらしている貧民にとってはうれしくもない気休めにすぎなかったという。しかし、魔術がまかなってきた需要は、新しい教会の禁令くらいで消えるものではなかった。教会がもう魔術を提供してくれないのなら、一般庶民は、どこかよそにそれを探し求める。当時の信徒の態度は、教会で酒を飲み、唾を吐き、説教師をやじり倒し、悪態をついた。カトリック教会については、公式教義よりも、霊験あらたかな魔術への〝権利〟だったという。エリザベス朝の国教会によってその〝権利〟がきびしく退けられるや、別の男女がこれを取り上げ、かつてカトリック教会が与えたと同じ約束を与えて、同じサービスを提供した。この種の人たちは魔法使い、女魔法使い、お祓い師、まじない師、呪術師、妖術師、魔女などと呼ばれてエリザベス朝の英国ではどの村落共同体においてもおなじみであったという。白魔女、黒魔女は、その役割、教会との対処関係で論じられたようであるが厳密な識別は困難であった。たとえば自ら魔女と名乗った人たちの動機には多くのことが考えられようが、浮浪者として道端にさまよいでた人びとの場合と同じで、貧困から逃れたいという物質的欲望がもっとも重要なものであったと推測されている。浜村正夫氏の『魔女の社会史』にも指摘があるがエリザベス時代の村で独り暮しをしている老婆にとって、なんとか生き残ってゆくことと耐えきれない貧乏との差は、わずかに一握りの豆、一袋の穀物、二、三個の卵の問題に根差していたと考えられている。貧しさのなかでの魔術行使へのささやかなむ

くいや生活維持への期待ともいえるであろう。ただ、魔女の処断については、フランスのロレーヌでは一五八〇年から一五九五年の間に九〇〇人、イタリアのコモでは一五二四年だけで一〇〇〇人が火刑に処せられたのに比して、エリザベス一世の登位した一五五八年から、英国で妖魔術が法定犯罪でなくなった一七三六年までに、エセックス、ハーフォードシャー、ケント、サリーの諸州を含む首都圏巡回裁判区の法廷で約五一三件の告発があり、有罪判決は二〇〇件一〇九人が縛り首になった。この違いは、英国では魔女は特定の個人に対して、特定のよこしまな行為をたくらんだ咎で裁かれたのであって、大陸のように、悪魔と契約を結んで不滅の魂をうしないこの世の〝魔王の代理人〟の一人となったとの科で処断されたものではないという理由の差に求められている。この魔女についてもエリザベス朝の地域に暗くよどんだ貧しさとそのあがきという社会史の事実―貧民史を彩る主題の一環として位置づけられるものであろう。

Ⅳ　占星術師と錬金術師の項についても、天文学史や科学史のテーマあるいは、渋沢龍彦氏などの研究の広汎な主題にもかかわり、民衆史としてもきわめて興味ぶかく、当時の生きることの探究や物欲の表現として考究できるが、貧民像との相関は裏社会の群像としてはやゝ距離があるので本書の内容の紹介は省略したい。

街道のならず者の項は、当時の底辺層の存在形態として重要な指摘になっている。たとえば、ヘンリー八世による修道院の解散も、当時増大しつつあった浮浪者を増大させる働きをした。カリタスによる庇護によって、浮浪者予備軍を路上の彷徨から守っていたこともあるが、修道院の解体は、修道院の毎日の営みを支えてきた多数の人々―庭師、肉屋、料理人、洗濯夫、……の人々のくらしを奪い去った。そして、ヘンリー八世の顧問官、トマス・クロムウェルの鉄槌の一撃により、雨露をしのぐべき住処の保証を奪われ、路上にさまよい出て、自らの才覚だけでくらしを保つ以外に取るべき手段はなかったという。この街道とか、路上という場は、貧民の多様な存在形態を考えるときにとくに注目される。堀田善衛氏の『路上の人』（新潮社刊）という作品は、中世以来の従属者―底辺層の人々の存在状況の深い背景を描出して、この主題とも相関するものである。本源的蓄積期における修道院の解体をふくむ〝封建的諸階層の解体〟などが〝労働力の創出、陶冶、訓練〟というカテゴリーの内実として、この裏社会の社会状況は一つの理解の手だてとなるものであろう。宗教改革は、巡歴の托鉢修道士、免罪符販売人などの合法化を廃止して、法の立場からは、彼らを浮浪者におとしてしまい慈善施設の徴集人、集金人は、エリザベス治世中も国内を歩きまわり、それらの活動は、山師どもにとって、偽って金を集める実り多い猟場を提供したといわれる。路上を舞台にわが国の高野聖、勧進聖などの遊行人、ごまの灰、願人坊主への転落をいろどる賤民史の経過とも対比されてくる。トマス・モアーの『ユートピア』の囲い込みの描写、農民の貧困化と放逐、抑圧の社会史ともこの〝路上の人〟の運命は直接に相関する。生計の資を失った男女の多くは、浮浪者生活に入り、

エリザベス時代の街道には、彼らの大群が群れていて、そのため、旅行は気軽には企てられない行事になったという記述もある。泥棒、乞食、旅女郎（ドクシー）、旅乞食、ぼろ乞食、海難乞食、唖乞食、流れ者（ローグ）と多彩な呼び名でいわれた。その溜り場がビアホールで、エールからビールへの転換、ビールはエールより長持し、味もよかったが醸造はむつかしかった。酒場の経営者は、醸造業者から信用買いをし、投資は台所におくお客用の机とベンチでことたりた。生きていけるかどうかぎりぎりの生活者の貧しい農民、職人にとって、酒場の経営は有用な臨時収入源となり、その納屋をエリザベス朝では一晩一ペニーで浮浪者に貸し出した。無宿者、日傭労働者にとっては、酒場は元気を回復する、人とつきあう唯一の場であった。エドワード六世の一五五三年、イングランドには少くとも二万軒、一六二五年のチャールズ一世の即位時には三万三〇〇〇軒を越えたといわれる。英国のパブの歴史的背景でもある。盗品を隠す場でもあり、路上―酒場、大市とこのネットワークに実に多種、多様の底辺層が出没していたようである。

オートリカスとその一族は、プロの犯罪者、浮浪者に加えて全国いたるところに違法ではないものの、パートタイムの盗み、詐欺を働く機会のもてる商売で、かろうじて生計を営んでいる何千、何万という男女、子供のいたことに関連する。行商人、オートリカスとその周辺に、手品師、呪術師、魔術師、吟遊楽師、熊芸人、鑄掛屋、旅役者、さきの街道のならず者とかさなって、サルガードは、彼らはいわば、エリザベス朝裏社会の外縁を飾る、ぼろぼろではあるが色彩豊かな総（ふさ）であったと評している。

〝お月さまのお気に入り〟（シェークスピアー『ヘンリー四世』の第一部の台詞）であって、ジプシーたちのことである。ジプシーの運命は、本国生まれの浮浪者と比べていっそう苛酷であった。異国風、神秘、興奮があったが教区への近接について警告され、阻止される特異な裏社会の構成員でもあった。

V　テューダー朝の英国の貧困は人口の増大を背景として、中世的な貧民たることは神の定め、〝ある者らを富める者の手から恩恵を受けられるように貧乏に定めたまいました〟という秩序と思考をつき崩した。エンクロージア（共同地の囲い込み）、貧しい作男の解雇、さきの修道院解体による慈善施設の消滅、一五四〇―五〇年代のはげしい物価上昇などが貧民の大量化の主因である。救貧法をふくむ社会的対応の必然性もここにある。

院内救済としてのブライドウエル（元王宮）は救貧院兼矯正院として設立され、貧民の救済と淘冶の場となった。ベドラムはベツレヘム慈善病院の悪名高い精神障害者保護施設として知られ、サルガードはそこでは〝狂人見物〟はエリザベス時代人の普通の気晴しであり熊いじめ、芝居見物とおなじ、あるいは動物園見学が今日のわれわれに持っている程度の娯楽の一部であったと当時の状況を紹介している。処遇史の変遷としても注目すべき記述といえよう。映画「エレファントマン」にもこの状況の再現があった。

『エリザベス朝の裏社会』

さらにカウンター監獄、クリンク監獄などの収容施設の処遇については、エリザベス救貧法の前期、残虐立法における貧民、浮浪者の処遇状況の内実として、その収容者の位置、層、処遇形態、維持管理の条件などサルガードの描写は社会史的に詳細をきわめてきわめてリアルである。

私たちは、これらの記述によって、英国の旧救貧法とその施行をふくむ貧民の各層とその生態ともいえるものに出会うことになる。本書は、実に生々としかも豊富な文学的資料、入手困難なパンフレット類を駆使してほとんど未紹介のエリザベス朝の裏社会を描出して汲めども盡きぬ態のまた社会史としての関心を触発する好著といえよう。

原書名 Gamini Salgado, The Elizabethan Underworld (1977) である。訳者の松村赳氏は東京外語大教授で、M・リーズの『ロンドン庶民生活史』(みすず書房)、トレヴェリアン『イングランド革命』(みすず書房) などの訳者でもあり、練達で苦心の訳文である。